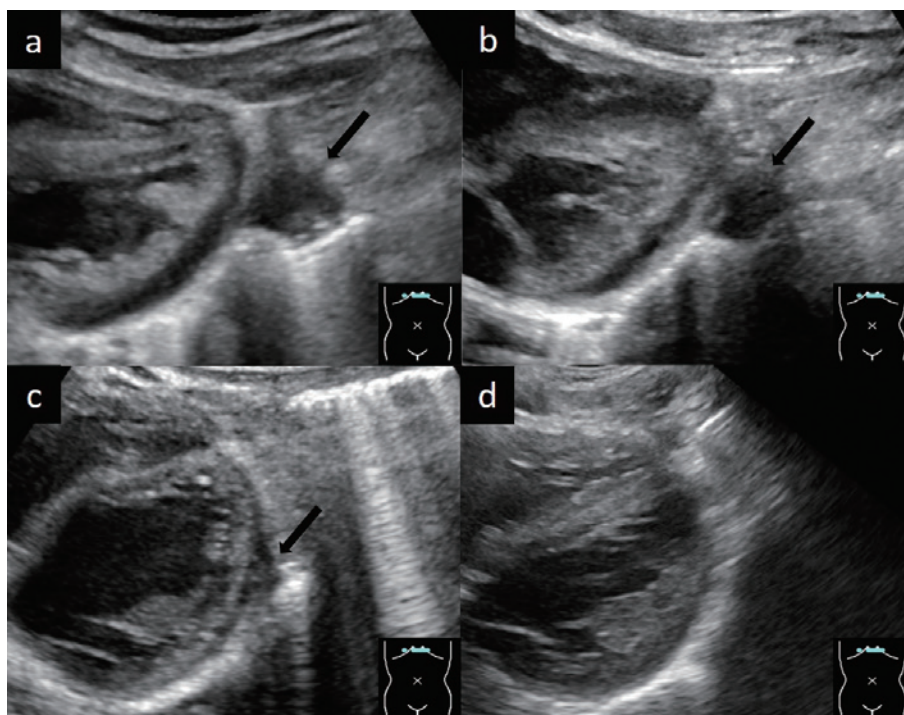


超音波検査による経過観察が可能であった炎症性肺腫瘍疑いの1例：川崎病の稀な合併症

古川 智子¹ 近藤 良明² 中野 幸一³

Fig. 1 心窩部超音波検査横断像。初回検査で心尖部左側に肺の高エコーに囲まれた低エコー腫瘍（矢印）を認める（a）。初回検査から19日後（b）、4ヵ月後（c）の検査で経時的に縮小し、7ヵ月後（d）には消失していた



4ヵ月女児。不明熱および左横隔膜に接する腫瘍の精査加療目的で紹介された。前医で施行された胸部造影CTにて、左横隔膜上に肝実質と同程度で均一に濃染される腫瘍を認め、病変の由来として肺、胸膜、肝臓などが考えられた。造影CTで均一な増強効果が認められたことから、液体貯留や嚢胞、膿瘍は否定的であった。精査のために施行した超音波検査では、心尖部左側に肺の高エコーに囲まれた径12 mm 大の低エコー腫瘍を認めた。覚醒下で体動があったことや心拍動、呼吸の影響もあり、カラーDプラでの評価は困難であった。エコーで様々な断面設定を行ったところ、肝臓とは離れて存在してい

ることが明らかになった。病変部はエコーフリーに近い低エコーで、肺胸膜由来の腫瘍性病変を示唆する充実性エコーや膨隆性変化は乏しく、肺の炎症巣を疑った（Fig. 1 a）。翌日施行された心臓超音波検査にて左右冠動脈瘤が認められ、主要症状は発熱と両側眼球結膜充血の2項目であったが、不全型川崎病第19病日と診断された。免疫グロブリン静注療法により解熱したが冠動脈瘤は残存し、左横隔膜上腫瘍と併せ超音波検査で経過観察を行った。冠動脈瘤退縮と並行して左横隔膜上腫瘍も縮小し、初回検査から7ヵ月後の検査では消失していた（Fig. 1 b-d）。

川崎病診断基準における参考条項の呼吸器項目に

A suspected inflammatory pulmonary nodule followed up by ultrasonography: a rare complication of Kawasaki disease

Keywords: Kawasaki disease, pulmonary nodule, ultrasonography

¹長野県立病院機構本部画像診断センター, ²長野県立こども病院放射線科, ³長野県立木曽病院放射線技術科

Tomoko FURUKAWA¹, Yoshiaki KONDO, SJSUM², Koichi NAKANO, RMS³

¹Headquarters Diagnostic Imaging Center, Nagano Prefectural Hospital Organization, 3100 Toyoshina, Azumino, Nagano 399-8288, Japan,

²Department of Radiology, Nagano Children's Hospital, 3100 Toyoshina, Azumino, Nagano 399-8288, Japan, ³Department of Radiological Technology, Nagano Prefectural Kiso Hospital, 6613-4 Fukushima, Kisomachi, Nagano 397-8555, Japan

Corresponding Author: Tomoko FURUKAWA (tomoko-furukawa@nkodomo-hsp.jp)

Received on June 30, 2021; Revision accepted on August 25, 2021 J-STAGE. Advanced published. date: August 1, 2021